

## 「不知火」の加温ハウス栽培における適正着果量

農業研究センター 果樹研究所 常緑果樹部

担当者：北園邦弥

### 研究のねらい

1月下旬から加温を開始した不知火の着果量の違いが、果実や樹体に及ぼす影響について調査し、適正着果量を把握する。

### 研究の成果

- 1 果実の肥大は、着果量が少ないほど良好で、12果区 > 16果区 > 20果区の順であるが、横径よりも縦径でその差は大きい。
- 2 果実の階級割合は、着果量が多いほど、果実横径が8.0~8.8cmの2L果の割合が高い。また、20果区では他の区に比べて4L果の割合が少ない。
- 3 細根の活性は、 $m^3$ 当り着果量が10果以下の少量着果区で最も高く、20果区では最も低くなる。
- 4 果実品質は、処理区による差はみられないが、20果区で他の区に比べて果皮色がやや劣る傾向にある。
- 5 翌年の着花は、12果区、16果区に比べて、20果区では少なく、新葉発生も少ない。また、生理落果後の着果数は、12果区に比べて、16果区、20果区でやや少ない。

以上のことから、 $m^3$ 当り16果では翌年の着果数がやや不足するため、 $m^3$ 当り着果数を14果内外とすることで、果実肥大も良好で、翌年の着花(果)も問題がなく、連年結果につながる。

### 普及上の留意点

- 1 「不知火」の加温ハウス栽培園に適用できる。
- 2  $m^3$ 当り14果の着果量のめやすとしては、葉果比で70~80枚に1果程度である。
- 3 着果量は、樹勢の違いによって加減する必要がある。

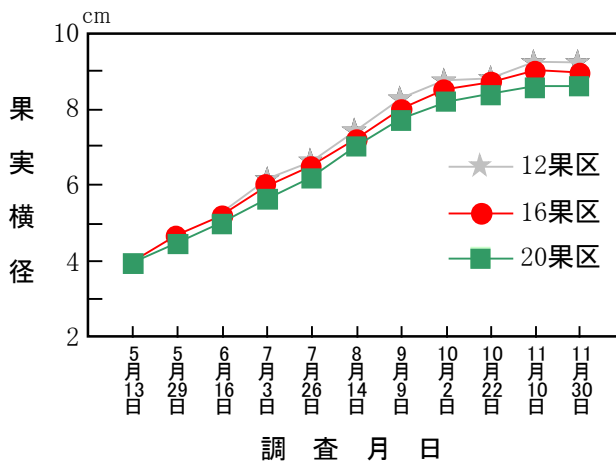


図1 着果量の違いによる果実肥大の推移

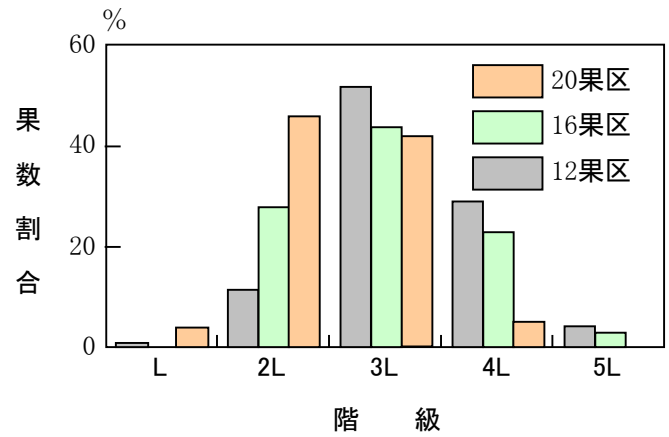


図2 m<sup>3</sup>当り着果量の違いによる果実階級比率

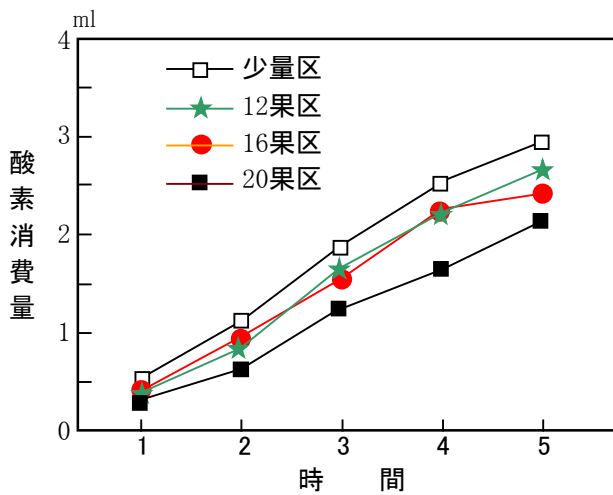


図3-1 着果量の違いによる細根の酸素消費量 (平成9年7月)

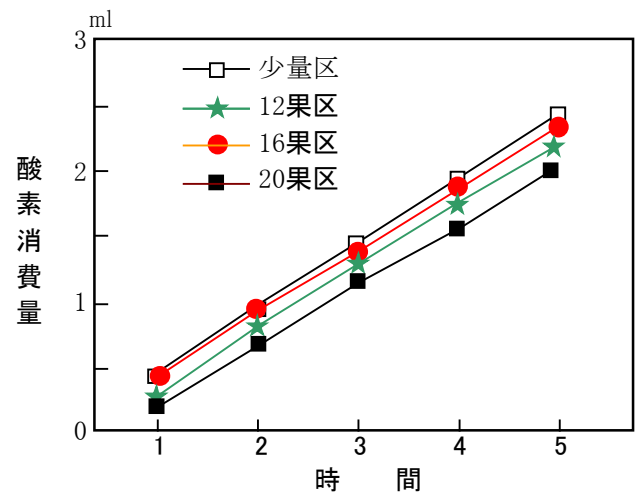


図3-2 着果量の違いによる細根の酸素消費量 (平成10年1月)

表1 着果量の違いが翌年の着花(果)量に及ぼす影響

処理区	着花数			100葉当り着花数	有葉化率	新葉率	100葉当り着果数
	有葉花	直花	全花				
12果区	32.8	46.5	79.3	15.9	59.5	47.3	1.71
16果区	43.5	32.5	76.0	11.0	63.8	52.6	1.25
20果区	10.2	6.3	16.5	3.6	63.4	36.5	1.01

注1) 調査日;平成10年3月3日(着果数は平成10年5月19日調査)